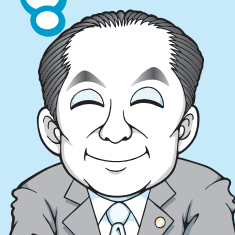


町長の一言



今年の8月15日

朝5時に起床、周辺の畑の畦道を歩きながら空を見上げると雲ひとつなく快晴。今日も暑くなりそうな様子に、1945年(昭和20年)8月15日、小学校4年生のときの記憶が甦ってきました。あの日の正午、縁側に出したラジオからの玉音放送も、快晴のカンカン照りの日だった事を思い出しました。

夕方から「しろさとふるさとまつり」が、今年もスタジイ広場で開催されました。にわか雨後の適度なグラウンドコンディションの中で、やぐらの周りに子どもから中高年まで、町内外からたくさんのお出場の輪ができました。踊り手の輪は最高潮のとき三重丸くらいになりましたが、盆踊りは、見物するものではなく、踊りの輪に参加する事が楽しいものではないかと思えます。来年は、ぜひ訪れた方全員に踊っていただきたいものです。私もいくらかダイエツトになったのではないかと自負しています。

家に帰ってテレビをつけると、吉永小百合さんが、原爆詩の朗読をしていました。「父を返せ、母を返せ：」しみじみとした語り口での詩を聞いていると、戦争の意味をまた問い返しながらから15日が過ぎました。

文芸しろさと

俳句



雨足の夜目にも見えて冷奴 飯田 勇一
高窓に蛙張り付き夏盛り 山崎 正行
無人駅向日葵一つ眩しかり 高橋 芦江
朝顔市下町の娘の生き生きと 飯村 昭子
休日バジャマふはり冷蔵庫 竹内 幸子
朝覚めて渴きに旨し麦茶かな 田所 厚子
夕端居夫植えし木の下に居り 仲田 まち子
梅雨晴間光まぶしき退院日 今瀬 多代美
振れ花無情に刈られ球技場 阿久津 あい子
秋、微雨湖の小鳥を濡らしけり 鯉 渕 寿美恵
土用入り川幅広く山映す いそべき よ
八幡宮茅の輪くぐりて友と会ふ 飯村 愛子
くらなしの強く香れり夜の駅 森 静江
朝寒や扉閉ざせる鎌倉 瀬谷 博子
広葉樹葉裏ゆらせて雷雨予知 岩下 金司
青田風吹く道子供会の御輿行く 岩下 通子
紅枝垂れうす緑さして夏盛り 田口 勝元
遠き日の青春恋うるコルネット 仲田 こう

短歌



わが老いを気にせず来たる短歌会も大正生れは幾人もなし 佐川 あや
集金係の吾が控えを保持するを怖がる不思議な出納係 杉山 みちこ
刈り込んで丸いばつちのつづじ園彩をたがひて庭華やがす 宮本 ふみ江
日脚伸ぶる初夏の夕ぐれ暑さ冷え澄みはたる空に沈黙すわれは 所 美恵子
狭庭辺の雑草抜きして離れ住む孫ら曾孫らの来る日を待てり 青柳 京子
あじさいの光る雫を掌にためて梅雨降る庭に亡き娘を偲ぶ 山形 式妙
枋若葉ゆるる街路樹は初夏の影落としゐて少女期のまま 渡辺 千紗子
五十本を庭に門辺に植ゑしとつきの花見ることなく逝きし隣人 秋山 愛子
鳩がゐて畑に蒔きたる大豆食めば「キヒゲン」の葉まぶしやる 大森 久子
大学を卒業したる青年が「農に生きる」と大豆蒔きゆく 高堀 よしの
梅雨が明けじわりじわりと照りつける元氣あるのは蟬の声だけ 富田 欽子
裏山の山百合の花馨しき香りただよい莊厳に咲く 鶴田 すが
炎天下コンクリートの割れ目より暑さいとわず生え抜く雑草 阿良山 ウメノ
裏山で夏がきたよと鳴く蟬に子供の頃の思い出 岩下 美知野

川柳



目覚めれば早や明け初めし大空に緑した、るききよう咲き初め 市川 義子
戦いは遠き昔と言はれども遺りし者の悼み消えざり 山崎 純義
わが歌を歌集に編むと妹に送らむとして集むる拙歌 薄井 ひろ
足音に鯉群れ寄りて大口甘える様にあけて餌を欲る 枝 不美
脚病みて籠もるほかなし庭に羽休めゆく禽も一刻の客 片見 和枝
山霧にけぶる斜面の花畑ひぐらしの啼くを聞きつつ眺む 川上 千代子
あどけなき少女の頬に一刷毛の紅さす如くねむの花咲く 島 愛子
スワンボート背景にしてマラソンの一団過ぎゆく千波湖ロードを 多田 志保子
生かされて八十歳を迎えたり歌詠む事に生き甲斐感す 坪井 きよ子
退院の途に就き見る沿道はバラ咲き盛る眩しきほどに 萩谷 登喜子
盆過ぎて暑さの残るこの深夜寝返り打ちて時計に背むける 和知 美智子
無償なる恩師の教え胸に沁む身をけずる如く導きくれし 富田 佐智子

ジヨギングの若きトレパン元氣くれ 青木 新三郎
スズ虫の鳴く音の音に癒やされて 中島 芳春
カラオケで余命楽しむ老いの道 北野 武
孫達の夏休みにはカブト採り 山本 隆莊